

---

# 共同研究の経過と概要

開発型共同研究「縄文時代の人と植物の関係史」

---

工藤雄一郎

## 1. 目的

1980年代以降、低湿地遺跡の発掘調査事例が増加したことから、通常の遺跡では残りにくい植物遺体の検出例や、それらの植物遺体に基づく考古学的・植物学的研究が蓄積されてきている。その結果、この20～30年で縄文時代の植物利用に関する研究が著しく進展し、植物利用の実態が解明されてきた。特に、縄文時代早期の段階でウルシやアサ・ヒョウタンといった外来植物が存在していたことや、縄文時代前期以降の東日本では、定住的な集落遺跡周辺にクリ林などの人為的な生態系が維持され、野生植物を利用するだけでなく、植物の生育環境にも積極的に働きかけた植物利用が行われていたことなどが明らかになってきた。この中には、食料資源として利用したものだけでなく、建築・土木用材、塗料、繊維など、様々な形で利用されていた植物が含まれている。

野生植物、栽培植物を含めて、縄文時代の人々が高度な植物利用技術を有していたことは一般的にも理解されつつあるが、それぞれの種の利用が「いつ」、「どのように」始まったのか、また、縄文時代以降の環境変動史とどのように関係していたのか、またどの程度、縄文時代の人々が生態系を改変し、人為的な環境が作られていたのか、これらの諸点が正確には把握されていない。

そこで、開発型共同研究「縄文時代の人と植物の関係史」（2010～2012年度）では、縄文時代の人と植物利用の関係史を、文化史的な視点からだけでなく、生態学的な視点からも明らかにすることを目的とした。そのため、縄文時代の植物利用の実態について、現在明らかになっている遺跡出土資料を再検討し、人が積極的に働きかけたと思われる種の時空間的分布傾向を整理すること、未調査資料を分析・研究することで縄文時代の植物利用に関する新たな情報を得ることを目指した。検討の主な対象とした植物は、縄文時代の人々と関わりが特に深い、クリ、ウルシ、トチノキ、アサ、ヒョウタン、ササゲ属やダイズ属などのマメ類、そして鱗茎類などである。単に出土資料からその利用方法を検討するだけでなく、現在の植物利用との比較や、それぞれの種の生態的特徴や分布などを検討し、<sup>14</sup>C年代測定、安定同位体分析、木材化石の分析、花粉分析、種実遺体の分析、デンプン分析、土器圧痕分析、DNA分析などの最近の研究成果を融合して、縄文時代の植物利用の実態とその時間的変遷を体系的に示すことを目的とした。

## 2. 研究組織の構成

1980年代以降、数多くの低地遺跡が調査され、考古学者と他の分野の研究者との学際的研究が行われてきている。1970年代後半から発掘調査が行われた福井県鳥浜貝塚をはじめとして、1980

年代には埼玉県寿能泥炭層遺跡、赤山陣屋跡遺跡、1990年代からは青森県三内丸山遺跡、栃木県寺野東遺跡、滋賀県粟津湖底遺跡、東京都下宅部遺跡、2000年代からは新潟県青田遺跡など、数多くの低地遺跡で学際的研究が行われ、縄文時代の植物利用に関する素晴らしい研究成果が蓄積されている。今回の共同研究のメンバーも、これらの遺跡の調査の多くに関わっている研究者である。

しかし、これまでの考古学研究では、考古学者と自然科学者との学際的共同研究というスタイルを取っていても、必ずしも考古学、年代学、植物学、民俗学などの異なる分野の研究成果の総合化が十分ではなかった。これまで考古学の「周辺科学」と位置づけられてきた研究領域に踏み込む考古学者が少なかったためであり、逆もまた同様である。お互いの情報提供のレベルにとどまらず、共通の問題について、方法論を超えた相互理解と活発な議論が必要である。

本共同研究の特色は、考古学の立場から植物利用を積極的に推進している研究者と、植物学の立場から植物利用を積極的に進めている研究者を中心にメンバーを構成している点であり、いずれも境界領域での研究を推進してきた研究者である。このメンバーで共通の研究課題について活発な議論を行うことにより、考古学と植物学の学際的研究を積極的に推し進めることができた点は、本研究の大きな意義といえる。考古学における新たな研究領域を切り開くという意味でも、「開発型共同研究」として本共同研究を推進できたことの重要性は、極めて高い。考古学と植物学、第四紀学、年代学のそれぞれの最新の研究状況を共有し、縄文時代の植物利用の変遷史について、多面的な視点から考察することができたためである。その成果の一端が、本研究報告にまとめられている。

研究組織（◎は研究代表者、所属は2013年3月、共同研究終了時）

小畑 弘己	熊本大学文学部・教授
小林 和貴	東北大学学術資源研究公開センター植物園・教育研究支援者（2011年度～）
佐々木由香	（株）パレオ・ラボ・考古分析支援部統括部長
篠崎 茂雄	栃木県立博物館・主任研究員
鈴木 三男	東北大学・名誉教授
千葉 敏朗	東村山ふるさと歴史館・学芸員
辻 誠一郎	東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授
那須 浩郎	総合研究大学院大学先導科学研究科・助教
能城 修一	森林総合研究所木材特性研究領域・樹種識別担当チーム長
百原 新	千葉大学大学院園芸学研究科・准教授
吉川 昌伸	古代の森研究舎・代表
吉川 純子	古代の森研究舎・研究員
◎工藤雄一郎	本館研究部考古研究系・助教
坂本 稔	本館研究部情報資料研究系・准教授
渋谷 綾子	本館研究部・特任助教
永嶋 正春	本館研究部情報資料研究系・教授
西本 豊弘	本館研究部考古研究系・教授

---

リサーチアシスタント（所属は当時）

一木 絵理 東京大学大学院新領域創成科学研究科・博士後期課程（2010・2011年度）

小林 弘和 千葉大学大学院園芸学研究科・博士後期課程（2012年度）

研究協力者（所属は当時）

石井 礼子 イラストレーター

真邊 彩 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科・博士後期課程

米田 恭子 (株)パレオ・ラボ分析調査研究部・研究員

### 3. 研究の経緯

<2010年度>

初年度である2010年度は、合計3回の研究会を開催するなかで縄文時代の植物利用に関する研究の整理と問題点の抽出を行い、共同研究員間で共通理解を深めた。中でも特に話題となったのは、縄文時代のウルシ利用、クリ利用、トチノキ利用、アサ利用、マメ利用、そして縄文時代晩期から弥生時代への移行期にかけてのイネ科栽培植物の利用などである。遺跡出土資料としてどのような植物質遺物があり、また現状でそれぞれの植物の利用がどの程度解明されているのかについて活発に議論を行った。

これまでの研究の問題点の整理だけでなく、新たな研究・分析も着実に進めた。一つは、東京都東村山市下宅部遺跡の資料の研究であり、花粉分析による縄文時代中期から後・晩期の植生復元のためのサンプリング（吉川昌伸）、土器付着植物遺体のデンプン分析のサンプリング（渋谷綾子）、蛍光X線分析によるウルシの塗膜分析（永嶋正春・千葉敏朗）、植物遺体研究に基づいた遺跡復元画製作（工藤雄一郎・佐々木由香・能城修一）などを進めた。その他、個別には、鹿児島県東黒土田遺跡から出土した縄文時代最古の貯蔵穴出土堅果類の<sup>14</sup>C年代測定（工藤雄一郎）を行い、年代的位置づけに関する重要な成果が得られた。

また、3回の研究会のほか資料調査として、鹿沼市のアサ栽培農家の見学を定期的に行ったほか（篠崎茂雄・工藤雄一郎・佐々木由香・能城修一・吉川純子・吉川昌伸）、栽培方法やアサ繊維の特徴について聞き取り調査を行った。また、茨城県常陸大宮市（奥久慈）のウルシ栽培地の見学（工藤雄一郎・能城修一・佐々木由香・千葉敏朗・永嶋正春）、下宅部遺跡の復元画製作のための検討会などを行った。

[2010年度の研究会の概要]

・第1回研究会 2010年4月24・25日 於：歴博

1. 共同研究の目的と今後の研究計画・予定について（工藤雄一郎）
  2. 縄文時代のウルシ利用研究の現状と課題（能城修一）
  3. 下宅部遺跡のマメ科炭化種子からみる縄文時代のマメ利用研究の現状と課題（佐々木由香）
  4. 花粉からみた縄文時代のクリとトチノキ利用研究の現状と課題（吉川昌伸）
-

- 
5. 種実遺体からみた縄文時代のクリ利用研究の現状と課題（吉川純子）
  6. 遺跡出土大型植物遺体データベースの意義と問題点（百原新）
- ・第2回研究会：2010年7月11・12日 於：栃木県鹿沼市および栃木県立博物館  
研究会初日は鹿沼市でアサ栽培を見学し、2日目には栃木県立博物館で3本の研究発表を行った。
1. 野州麻の生産用具（篠崎茂雄）
  2. 縄文時代におけるアズキ・ダイズ栽培について（小畑弘己）
  3. 縄文時代晩期から弥生前期における生業活動の変化について（那須浩郎）
- ・第3回研究会：2011年1月8日（土） 於：歴博
1. 繊維・糸・布の利用について—縄文時代から古代までを中心に—（永嶋正春）
  2. 漆液はどのように出てくるのか（鈴木三男）
  3. 2010年度の研究成果と2011年度の研究計画（工藤雄一郎）

#### <2011年度>

初年度は共同研究員の既存の研究成果を持ち寄り、情報を共有することが中心となったため、2011年度は主に下宅部遺跡の資料を扱い、土器圧痕分析、残存デンプン分析、花粉分析、顔料分析、年代測定などを進め、新たな基礎データの蓄積を進めた。

渋谷綾子は昨年度に継続して下宅部遺跡から出土した土器付着植物遺体の残存デンプン粒のサンプリングを行い、また石皿・磨石類についても残存デンプン粒のサンプリングを行った。下宅部遺跡の漆塗土器の顔料分析では、これまで赤色顔料にベンガラと水銀朱が用いられていることが分かっていたが、永嶋正春の分析によって水銀朱の比率が高いことがわかった。また、下宅部遺跡の堆積物試料の花粉分析を吉川昌伸が実施し、また試料中の植物遺体の<sup>14</sup>C年代測定を工藤雄一郎がおこなった。これにより、縄文時代中期から晩期までの時期を通して、詳細な年代に基づく花粉分析結果が得られた。これは、関東平野の縄文時代中期から後・晩期の遺跡での初めての事例となった。

この他、鳥浜貝塚から出土した縄文時代草創期にまで遡るウルシ材の再同定を小林和貴・鈴木三男・能城修一が行い、また<sup>14</sup>C年代測定を工藤雄一郎が実施した。漆利用の起源を考えるうえで極めて重要な鳥浜貝塚のウルシ材の年代を決定できたことは、今回の共同研究のなかでも最も大きな成果の一つである。また、宮崎県王子山遺跡から出土した縄文時代草創期の炭化鱗茎類の<sup>14</sup>C年代測定を工藤雄一郎が実施し、鱗茎類の同定を佐々木由香・米田恭子が行った。これは、縄文時代で最も古い鱗茎類利用の証拠であり、重要な分析結果が得られた。この他、現生マメ科種子の炭化実験（佐々木由香）や、下宅部遺跡出土ウルシ属果実の同定（吉川純子）なども進めた。

また、2011年度も栃木県鹿沼市のアサ栽培の見学、茨城県常陸大宮市のウルシ畑の見学を定期的に行った。これに関連して、縄文時代の堆積物からアサ花粉やウルシ花粉が検出された場合に、どの程度の距離にアサやウルシがあったのかを推定するための基礎的なデータを得るため、アサの開花時期に合わせて鹿沼市のアサ畑周辺に花粉トラップを設置し、花粉飛散距離の調査をおこなっ



た。茨城県常陸大宮市のウルシ栽培地においてもウルシ花粉飛散距離を調べるため、2012年度の調査のための予備調査（トラップ設置可能場所の確認、雄株・雌株の本数の調査）を行った（吉川昌伸・吉川純子・工藤雄一郎・篠崎茂雄・佐々木由香・能城修一・千葉敏朗）。

このほか、これまでアサの出土が報告されている遺跡の調査事例の集成（一木絵理）や、遺跡発掘調査報告書に掲載されている大型植物遺体の分析例のデータベース化のための文献集成についても着実に作業を進めた（百原新・工藤雄一郎）。

#### [2011年度の研究会の概要]

・第4回研究会 2011年5月15・16日 於：東村山市八国山たいけんの里

1. 下宅部遺跡出土遺物見学会
2. 下宅部遺跡の概要と出土遺物について（千葉敏朗）
3. 下宅部遺跡から出土した土器付着植物遺体の残存デンプン粒分析（渋谷綾子）
4. 下宅部遺跡の河道土壌サンプルの花粉分析（吉川昌伸）
5. 下宅部遺跡のクルミ塚から出土したウルシ果実について（吉川純子）
6. 下宅部遺跡の編組製品および素材束の素材同定（佐々木由香・小林和貴・米田恭子・鈴木三男）
7. 下宅部遺跡の復元画の進捗状況（工藤雄一郎）

・第5回研究会：2011年10月22（土）・23日（日） 於：東村山市八国山たいけんの里

1. 三内丸山遺跡の縄文ポシェットの素材について（鈴木三男・小林和貴）
2. 鳥浜貝塚の縄文時代草創期のウルシ材の再同定と年代（小林和貴・鈴木三男・能城修一・工藤雄一郎）
3. 下宅部遺跡出土土器に残る赤色顔料の分別について（永嶋正春）
4. 下宅部遺跡の圧痕調査—結果報告—（小畑弘己・真邊彩）
5. 下宅部遺跡の復元画の進捗状況（工藤雄一郎）
6. 来年度のIOP/IOPCのセッションについて（工藤雄一郎・能城修一・那須浩郎）
7. 最終年度の予定と研究報告、歴博フォーラム開催について（工藤雄一郎）

#### <2012年度>

2011年度に引き続き、茨城県奥久慈でウルシ花粉飛散調査を進めた（吉川昌伸）。下宅部遺跡の資料については、下宅部遺跡の土器底部圧痕についてレプリカ法によって分析を進めたほか（真邊彩）、下宅部遺跡から出土したウルシ属果実の同定を進め（吉川純子）、繊維製品の分析も行った（小林和貴・鈴木三男）。他に、宮崎県王子山遺跡の炭化植物遺体と土器内面付着炭化物および鹿児島県三角山Ⅰ遺跡の土器内面付着炭化物の分析を進め、縄文時代草創期の植物利用と土器との関係について検討を進めた（工藤雄一郎）。

また、縄文時代との比較の目的で、島根県西川津遺跡から出土した弥生時代前期の漆液容器と傷跡のあるウルシ材、矢野遺跡から出土した弥生時代前期の漆パレットなど、漆関連遺物の<sup>14</sup>C年代

測定を実施した（工藤雄一郎・坂本稔・永嶋正春）。

2012年度は合計3回の研究会を開催した。内容は2010年・2011年に行った研究・分析の報告が中心となった。また、研究会のうち1回は宮崎県椎葉村で開催し、椎葉勝氏の焼畑を見学し、焼畑での雑穀栽培や山間部での野生植物利用について議論を深めるとともに、ミニ研究会を開催し、調査に同行した学生向けの研究紹介も行った。

2012年8月に中央大学で開催された、第13回国際花粉学会議（IPC-XIII）・第9回国際古植物学会議（IOPC-IX）合同大会の国際学会において、本共同研究の一部についても研究発表を行った。

このほか、昨年度に引き続き大型植物遺体の分析例のデータベース化のための文献集成を進め、歴博に所蔵されている報告書からの集成作業を完了した（百原新・小林弘和・工藤雄一郎）。

一方、下宅部遺跡から出土した傷跡のあるウルシ杭を題材にして、石器でウルシに傷を付ける様子の復元画を製作した。また、ダイズ属のマメ利用について議論をより深めるため、ツルマメ利用とダイズ利用の2つのパターンの復元画を製作した。これらの復元画は以下で述べる、「第86回歴博フォーラム」においても活用し、本共同研究での研究成果を一般に伝えるにあたって効果を発揮した。

2012年12月15日（土）には歴博フォーラム「ここまでわかった！縄文人の植物利用」を開催した。これは、本共同研究の成果発表の一環として、縄文時代の植物利用研究の最前線をより一般向けにわかりやすく紹介することを目的とした講演会である。

フォーラムでは工藤雄一郎が共同研究の趣旨説明をおこなった後、8本の報告と最後に討論をおこなった。まず、佐々木由香が最近20年の研究成果のトピックを、小畑弘己が土器圧痕研究から明らかになってきた縄文人によるマメの栽培化の問題を紹介した。鈴木三男は植物学の立場からウルシがいつ、どのように日本に入ってきたのかを紹介した。報告4～6（千葉敏朗・永嶋正春・吉川昌伸）は、共同研究での中心的な研究対象となった下宅部遺跡の研究成果に重点を置いたものである。そして、東アジアでの稲作の開始と縄文時代から弥生時代への移行期の稲作の問題を那須浩郎がまとめ、能城修一が遺跡出土木材の研究から、縄文人によるクリ・ウルシを中心とした森林資源の管理の様相を紹介した。

フォーラムの申込人数は12月初旬には定員を超え、当日の入場者数もきわめて多く会場は満席となるなど、一般にとっても身近な「植物」の利用の文化史に対する興味・関心の高さが改めて浮き彫りとなった。特に、縄文人によるクリやウルシの管理、マメの栽培化は学際的研究の最前線の成果であり、非常に好評だった。

なお、このフォーラムの記録集は、「ここまでわかった！縄文人の植物利用」として、2013年12月に新泉社から刊行した。

#### [2012年度の研究会の概要]

・第6回研究会：2012年6月2日（土）・3日（日） 於：東村山市八国山たいけんの里

1. 圧痕法からみた九州縄文時代前半期の植物利用（真邊彩・小畑弘己）
2. 朝鮮半島櫛文土器の栽培植物と植物利用—韓国栽培起源再考—（小畑弘己・真邊彩）
3. 下宅部遺跡の土器と石器の残存デンプン粒（渋谷綾子）
4. 王子山遺跡から出土した縄文時代草創期の炭化植物遺体の年代と同位体分析（工藤雄一郎）

- 
5. 王子山遺跡から出土した縄文時代草創期の炭化鱗茎の同定（米田恭子・佐々木由香）
  6. 研究報告執筆内容報告（全員）
- ・第7回研究会 2012年10月20日（土）・21日（日） 於：宮崎県椎葉村  
椎葉村の焼畑見学，椎葉民俗博物館見学  
＜ミニ研究会（於：民宿焼畑）＞
- ・デンプンは語る（渋谷綾子）
  - ・麻について（篠崎茂雄）
  - ・縄文人は何を食べたのか？—遺跡の種実の分析から分かること（佐々木由香）
  - ・遺跡から出土する雑穀と雑草（那須浩郎）
  - ・年代を測ると歴史観が変わる！（工藤雄一郎）
  - ・現代焼畑と縄文農耕（小畑弘己）
  - ・巧みに木を利用した縄文人—木材の樹種同定から分かること（能城修一）
  - ・火山灰に埋もれた植物遺体からの古環境の復元—指宿市橋牟礼川遺跡の例（百原新）
- ・第8回研究会 2012年12月16日（日） 於：歴博
1. 下宅部遺跡の底部敷物圧痕分析—土器製作に用いられた編組製品について—（真邊彩）
  2. 韓国新石器時代圧痕調査追加報告（小畑弘己）
  3. 下宅部遺跡の繊維試料について—現生標本との比較—（小林和貴）
  4. 研究報告の執筆内容，期限などの確認，フォーラム記録集の刊行について（工藤雄一郎）

[歴博フォーラムの概要]

- 第86回歴博フォーラム「ここまでわかった！縄文人の植物利用」  
2012年12月15日（土）10：00～16：30 於：歴博講堂，参加者269名
- ・共同研究「縄文時代の人と植物の関係史」趣旨説明（工藤雄一郎）
  - ・ここまでわかった！縄文人の植物利用（佐々木由香）
  - ・マメを育てた縄文人（小畑弘己）
  - ・縄文人が漆に出会ったのはいつ？（鈴木三男）
  - ・適材適所の縄文人—下宅部遺跡—（千葉敏朗）
  - ・下宅部遺跡の漆（永嶋正春）
  - ・縄文人と植物との関わり—花粉から分かったこと—（吉川昌伸）
  - ・イネと出会った縄文人—縄文時代から弥生時代へ—（那須浩郎）
  - ・縄文人は森をどのように利用したのか（能城修一）
  - ・討論（司会：坂本稔・工藤雄一郎）
-





1. 第1回研究会  
(2010年度, 歴博)



2. 下宅部遺跡の堆積物試料の探索  
(2010年度, 八国山たいけんの里)



3. 第2回研究会  
(2010年度, 栃木県鹿沼市のアサ栽培見学)



4. 第2回研究会  
(2010年度, 栃木県鹿沼市のアサ栽培見学)



5. 第4回研究会  
(2011年度, 下宅部遺跡の資料見学)



6. 下宅部遺跡におけるデンプン粒分析のための試料採取  
(2011年度, 八国山たいけんの里)





7. ウルシ花粉飛散調査のための予備調査  
(2011年度, 茨城県常陸大宮市)



8. ウルシ花粉飛散調査のための予備調査  
(2011年度, 茨城県常陸大宮市)



9. アサ花粉飛散調査のための器具設置  
(2011年度, 栃木県鹿沼市)



10. アサ花粉トラップの設置状況  
(2011年度, 栃木県鹿沼市)



11. 下宅部遺跡土器圧痕調査  
(2011年度, 八国山たいけんの里)



12. 下宅部遺跡土器圧痕調査  
(2011年度, 八国山たいけんの里)





13. 第6回研究会  
(2012年度, 八国山たいけんの里)



14. 第6回研究会  
(2012年度, 八国山たいけんの里)



15. ウルシ花粉トラップの設置  
(2012年度, 茨城県常陸大宮市)



16. ウルシ花粉トラップの設置  
(2012年度, 茨城県常陸大宮市)



17. 下宅部遺跡土器底部圧痕の調査  
(2012年度, 八国山たいけんの里)



18. 下宅部遺跡土器底部圧痕の調査  
(2012年度, 八国山たいけんの里)





19. 石器によるウルシ樹液採取実験  
(2012年度, 茨城県常陸大宮市)



20. 石器によるウルシ樹液採取実験  
(2012年度, 茨城県常陸大宮市)



21. 第8回研究会  
(2012年度, 宮崎県椎葉村での焼畑見学)



22. 第8回研究会  
(2012年度, 民宿焼畑での研究会)



23. 第86回歴博フォーラム「ここまでわかった! 縄文人の植物利用」(2012年度, 歴博)



24. 第87回歴博フォーラム「ここまでわかった! 縄文人の植物利用」(2012年度, 歴博)

#### 4. 共同研究の成果

本共同研究では、考古学・植物学・民俗学・年代学・地球化学などのそれぞれの異なる切り口から、「縄文時代の植物利用の解明」という共通のテーマについての活発な議論を行った。その結果、縄文時代の森林資源管理の問題や、遺跡周辺の人為生態系の広がり、ウルシやアサなどの栽培植物の利用の問題、マメの栽培化の問題など、お互いに問題点と現状での到達点を共有することができた。一方、民俗学の篠崎茂雄氏に共同研究員に加わっていただいたことで、アサの利用について議論を深めることができたほか、奥久慈のウルシ畑での調査や椎葉村での焼畑の見学を通じて、現生の植物の観察を行うとともに、それらの利用の文化の現状を知ることができた点は、過去の植物利用を探る上でも重要である。

こうした3年間の議論の内容が、国立歴史民俗博物館研究報告として一冊にまとめることができた点は、極めて大きな成果と言える。

3年間の共同研究で、進められた部分と進められなかった部分がある。下宅部遺跡の資料の分析は、今回の共同研究で最も多くの力を注いだ部分であり、2006年に下宅部遺跡の発掘調査報告書が刊行された時点では明らかになっていなかった植物利用や、古植生の変遷がより詳細なデータをもとに議論できるようになった。遺跡単位での徹底的な分析・研究と、その積み重ねが、縄文時代の植物利用を解明していく上で極めて重要であることが再認識できた。また、花粉飛散調査や、漆樹液採取実験などの基礎研究は、遺跡から得られたデータを解釈していく上で必要不可欠である。今回、ウルシとアサの飛散距離に関するデータが得られたこと、石器による漆の樹液採取について実験によって一定の見通しを得たことは、大きな成果である。

一方、当初、植物利用の全体像を縄文時代草創期から晩期まで、通時的に整理することを研究の目的の一つとしたが、3年間の研究期間内には網羅的なデータ収集には至らなかった。また、百原新と工藤雄一郎が中心となって進めてきた「遺跡出土大型植物遺体データベース」は、今後の基礎研究および文献探索において重要な資源となるものであるが、現状ではまだ報告書のコピーが終了した段階であり、データベース化して一般公開するには至っていない。今後、これらの課題についても積極的に取り組んでいき、縄文時代の植物利用の解明を進めていきたい。

#### 5. 謝辞

本研究を実施するにあたって、下宅部遺跡の数多くの資料を提供していただき、研究会開催にあたって会場を何度も使用させていただいた、東村山市教育委員会および関係者の皆様には大変お世話になった。また、以下に挙げた方々・諸機関のほかにも、多くの方々にご協力とご指導を賜った。厚く御礼申し上げます。

大森由久，神長正則，椎葉勝，本間健司，本間幸夫，宮澤美和子，ローランド・フッター，奥久慈工房，栃木県立博物館

(国立歴史民俗博物館研究部)